

## 東亜大学総合人間・文化学部公開講座「千夜一夜」要旨

### テーマ「下関と大陸」

#### 第11話 近世下関の発展と 伊崎新地の開発

小川 國治 (文化文明史研究室)

かつて、下関には、イギリス領事館の近くにジャーディン＝マセソン商会の支社があった。19世紀に世界で最大の商社であった同商会支社の存在は、下関の経済的な重要性を象徴するものと言えよう。下関（赤間関）は、古来、九州への「渡海口」として重要な役割を果たしたが、他方、「海の道」の結節地として発展したも広く知られている。

本講座では、Ⅰ長州藩と巨大商社——ジャーディン＝マセソン商会——、Ⅱ伊崎新地の開発——長州藩宝暦改革と流通政策——、Ⅲ伊崎新地と越荷方——米穀市場の創設——、Ⅳ幕末・維新期の下関——開港と国際化——など四つの観点から、近世中期以降、下関に繁栄をもたらした「伊崎新地の開発」を基に、長州藩の撫育方・越荷方との関係やジャーディン＝マセソン商会の支社が存在した理由なども明らかにした。

Ⅰでは、長州藩士5人のイギリス留学や長州藩と薩摩藩の経済的・政治的結び付きについて、ジャーディン＝マセソン商会とイギリス商人トマス・ブレイク・グラバー（同商会のエージェント）が大きな役割を果たしていたことを指摘した。Ⅱでは、長州藩宝暦改革の重要政策として、急速に発展していた海運への積極的な乗り込みをはかるため、新設の撫育方による港町の開発が進められたが、その最重要拠点とし

て伊崎新地が位置づけられていたことを明らかにした。Ⅲでは、伊崎新地の開発の目的が海運による商品流通の掌握であるとともに、米穀市場の創設でもあったこと示し、貸銀業と倉庫業を営む越荷方の実態を具体的に述べた。Ⅳでは、従来、あまり注目されていなかった石炭（長州炭）の開発を取り上げ、石炭が長州藩に大きな利益をもたらし、薩長交易でも重要な位置を占めていたこと、伊崎新地がその拠点になっていたこと、その延長線上に下関商社構想が存在したことを明らかにした。

以上のことから、「伊崎新地の開発」の歴史的な意義として、幕末・維新时期以降、下関が西日本市場と東アジア市場の結節点として発展する基盤を形成したことを強調した。

(平成15年7月5日開催)

#### 第12話 大陸との交流の窓口： 下関

黄 曉 芬 (文化文明史研究室)

2千年余もの昔から、海をへだてた中国大陸や朝鮮半島との交流をもつ日本。稲作農耕や豊かな暮らしに適した石製・金属製道具や信仰、生活習慣が日本列島の各地に伝えられた。

下関は山陽・山陰・北部九州を結ぶ要衝の地にあり、また大陸にも最も近い。そのため、早くも内外文化交流の窓口としての歴史的役割を果たしてきた。こうした由緒ある下関の歴史を土井ヶ浜遺跡から発見された渡来人の人骨、綾羅木郷遺跡、古墳から出土した大陸的要素をもつ遺物の数々、さらに朝鮮通信使の足跡を辿りながら考えてみた。主な内容は以下の通りである。

## 一. 稲作文化と渡来人

1. 米作りの始まり：水田の開発（灌漑・貯蔵・酒造）；農具（鎌・石庖丁・クワ・鉄斧等）  
弥生土器（煮炊き・盛付け・貯蔵・供献用の深鉢・壺・高杯など）
2. 縄文系弥生人と大陸系弥生人：井ヶ浜遺跡〈渡来人の系譜〉  
南方型歯列〈縄文人〉と中国型歯列〈弥生人〉  
DNAの研究〈人類集団の系統関係〉

## 二. 大陸系の遺物と新技術の導入

1. 金属器の登場：青銅器・鉄器の使用と普及
2. 下関からの注目すべき発見：  
中国系（鉄斧・トンボ玉・蓋弓帽と銅鏡・銭）  
朝鮮系（多鈕細文鏡・細型銅剣・磨製石剣）
3. 技術者集団の渡来：土木技術、須恵器、馬具、甲冑、装身具

## 三. 対外交渉の要所

1. 白村江の戦い(663)：新羅と唐：百済と日本の海戦
2. 朝鮮式山城：百済亡命者の技術による長門城
3. 古代の長府：長門国府と国分二寺；造銭「和同開珎」

## 四. 朝鮮通信使の往来

1. 国王派遣の文化使節団（1607～1811）
2. 善隣友好の橋架け

（平成15年7月12日開催）

# テーマ「私達と科学」

## 第13話 「よのなか」に活かす 数学

日比野 剛 士（情報技術教室）

今回の公開講座では、今まで数学が嫌いだったり不得意だったりして、数学を遠ざけてきた方々にあらためて数学的な考え方を楽しみながら学んで頂ける機会を設けてみようと思いました。科学者や技術者、建築士、証券アナリストなどの職業に就いている方以外は、数学という学問を実社会で使う機会は少ないかもしれませんが。しかしながら「よのなか」には数学的な考え方が実に多く隠されています。講演ではその幾つかを紹介して本質を見抜く力として数学を「よのなか」に活かすことを考えてみました。

最初に4つの図形の中から仲間はずれのものは何かを考えてもらいました。この問題の答は一つではなく、人によって注目する部分が異なることを説明しました。次に郵便番号の判別メカニズムに「分類する」という数学の知恵が活かされていることをお話しました。まず、マッチ棒を組み合わせて数字をいくつも作ってもらい、それらを分類していきました。この分類には「図形をゴムひもでできているものと考え」といった数学ではよく知られている思考方法（いわゆる「トポロジー」という数学的思考方法）を用い、その発想法を楽しんで頂いたつもりです。これらの題材は「数学脳をつくる 岡部恒治・藤原和博著 新潮社」から引用させて頂きました。

分析したい事柄の「本質は何か」を判断し、本質を変えないような変形で問題を簡単な形にもっていくのは数学の作業のひとつです。例えば、複雑な問題について思考しようとするとき、なるべく単純に物事の本質を眺められるよ